

# 世界各国の 産業用 ヘンプ

第12回

## デンマーク 持続可能な経済社会を目指す 家族経営体の挑戦

赤星 栄志 あかほし よしゆき

1974年滋賀県生まれ。日本大学農獣医学部卒。同大学院にて産業用ヘンプに関する研究により博士号(環境科学)を取得。99年よりヘンプの可能性と多様性に注目し、日本の大麻草に関する伝統文化復興と麻の研究開発に携わる。現在、日本大学生物資源科学部研究員などに在職。主な著書・編著に『ヘンプ読本』『大麻草解体新書』『大麻という農作物』がある。

スカンジナビアと呼ばれるヨーロッパ北部に位置するデンマークにも、17世紀に農民が海軍に供給するためにヘンプ栽培を奨励したという記録が残っている。現在の国土面積は日本の九州と同程度だが、ユトランド半島と大小400以上の島の島々から成り立つことから、伝統的に海洋活動が活発である。17世紀には海戦が相次ぎ、海軍が拡大していた時期で、帆布やロープなどの需要が高まっていたことがうかがえる。

農業分野に目を向けると、人口約580万人の小さな国ながら、高い国際競争力を持つ養豚や酪農のほか、起伏がなく平坦（最高地点は海拔173m）な地勢と肥沃な土壌を活かした小麦・大麦等の大規模な穀物生産も盛んだ。全国に11ある農業協同組合によって、生産、加工・流通、輸出に至るまで、農家が主体的に関与した形で運営されている。なかでもデニッシュ・クラウンは豚肉の輸出量で世界第1位を誇る食肉協同組合として知られている。

### ヘンプシードに注目 栽培は近隣農家と契約

デンマークでも、ほかのヨーロッパ諸国と同様に、化学繊維の台頭による需要の減少に加えて、1961年の麻葉単一条約の締結以降、ヘンプは全く栽培されなくなった。世界的に栽培が再開された後、98年から2000年に大学で試験栽培が行なわれたものの、ヘンプ栽培を推進する農家もヘンプ事業に乗り出す企業もなかなか出てこない状態が続いた。先に栽培を再開したEU圏の国々に倣って、法律でマリファナ成分であるTHC含有率が0.2%未満の品種であれば栽培できる環境が整っていたにもかかわらずである。

この状況を大きく変えたのは、モラループ社（Møllerup Gods）だ。創業はデンマーク王国の最高司令官の称号を授かったマルクスという貴族が立ち上げた1286年に遡る。その後、経営者が何度か変わり、1700年代には木材工場を営んでいた時代もあるという。現在は、1920年に経営権を取得した船主の孫夫婦（アン・ソフィーとステイグ・ガンボーグ）とその子ども4名を中心にした家族経営体として、国立公園内にある総面積415haの歴史的不動産を管理し、農業、林業、狩猟、馬、文化的なイベント事業を営んでいる（図1）。ヘンプが360度あらゆる製品を生み出すことに魅力を感じ、同社の持つ長い歴史を未来につないでいくためにも、持続可能な経済社会を目指す新たな事業としてヘンプ事業に挑戦したのである。



▶図1：国立公園のなかにあるモラループ社の敷地



◀図2：セブンイレブンで販売したヘンプシードを使ったスーパーフード・サラダ

まず、近隣の畑作農家に栽培を委託し、2015年に30haから栽培をスタートさせた。契約面積は翌16年には300ha、17年には600haに順調に拡大している。

同社が担当するのは、おもにヘンプの商品企画と販売だ。ヘンプシード



ド原料をさまざまな食品メーカーに持ち込んで加工を委託し、商品開発を進めている。当初から注目していたヘンプシードの食品は、通信販売や自然食品店などの専門店ではなく、普通の人が買えるように一般流通に狙いを定めていた。結果として、自社ブランドで商品化したものは、国内最大手スーパーのコープで販売している。また、大手コンビニのセブンイレブンには、スーパーフード・サラダという企画を持ち込み、ヘンプナッツを振りかけたサラダの商品開発にも関わった(図2)。栄養バランスに優れ、一般的な食品より栄養価が高い食品と定義されるスーパーフード・ブームが、ヘンプナッツやヘンプオイルの認知度向上に大きく寄与したという。

食品のほか、ヘンプオイルを使ったスキンケア商品や医療・サプリメント製品もプロデュースして販売にこぎ着けた。ただし、デンマーク国内では、マリファナ成分をほとんど含まないヘンプの葉を消費者に直接販売することが法律で禁止されている。そのため、収穫した葉を一旦ドイツに輸出し、CBD(カンナビジオール)を抽出し、製品化された医療・サプリメント製品を輸入して販売する形をとっている。

繊維については同社がオーナーと

なっており、6年に設立したアドバンス・ノンウーブン社という繊維加工会社担当している。もともとサイクル繊維の事業を展開していたが、ヘンプ繊維原料が入手できるようになってからは、モラループ社と提携して不織布を製造し、住宅用断熱材の販売にも展開している。

さらに、カナダの医療用大麻製造会社のキャノピー・グロース社の子会社としてスペクトラム・カンナビス・デンマーク社を設立し、18年1月から臨床試験事業を試験的にスタートさせた。産業用に留まらず、医療用を見据えた360度展開を実践していると言える。

図3:ヘンプ・イノベーション賞(食品部門)に同社がエントリーした「有機ヘンプマスタード」(180g入りで約4,500円)



図4:同賞(化粧品部門)にエントリーした「ヘンプ・コスメシリーズ」。ヘンプオイルを使ったもので、クリーム、バーム、ボディオイルなど12商品を展開



図5:同賞(繊維・複合素材部門)にエントリーした「小さなガーデンギフトセット」。ヘンプ繊維を使った不織布の苗床にカイワレ大根をはじめとしたさまざまな種が入っている。約10cm四方、厚さ3cmで、3種類の種セットを約1万4,900円で販売



### ヘンプ・イノベーション賞 3部門でファイナリストに

同社の取り組みは、国外でも評価を獲得しつつある。世界中のヘンプの事業者と研究者が集うヨーロッパ産業用ヘンプ協会の国際会議は、18年6月に初めて「ヘンプ・イノベーション賞」のコンペティションを実施した。同社は、繊維・複合素材部門、食品部門、化粧品部門のいずれにもエントリーし、90の商品・サービスのなかで見事に3部門ともファイナリストとなったのである。同社がエントリーしたのは、有機ヘンプマスタード(食品部門)、ヘンプ・

コスメシリーズ(化粧品部門)、ヘンプ繊維を使った不織布の苗床に種を入れた栽培キット(繊維・複合素材部門)だ。どの部門でも惜しくも1位を逃したが、同社の商品企画の実力を多くの人に印象づけた。

家族経営体のメリットを発揮することで、同社はわずか4年でスカンジナビア地域最大のヘンプ・プロデューサーにまで成長した。現在は、デンマーク産のものを国内のチェーン店で販売するという地産地消モデルを実践しているが、先行するEU圏のヘンプ事業体にも負けない商品企画力は、今後の展開も楽しみなどころである。